

スマホ社会における歩行者の「目的」と「歩き方」の生成プロセスに関する研究

田中 颯太¹・西村 亮彦²

¹非会員 有限会社ハートビートプラン

(〒530-0041 大阪府大阪市北区天神橋1-14-7, E-mail:sota@hbplan.jp)

²正会員 工博 国士舘大学 理工学部 まちづくり学系 准教授

(〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1, E-mail:nishimura@kokushikan.ac.jp)

近年、歩行者中心のウォーカブルまちづくりが全国的に進められている。まちなかにおける歩行者の歩き方や移動経路を検討するにあたり、近年ECサイトの普及や新型コロナウイルスの流行によりネットを通じた購買行動が増えたことや、スマートフォンの普及・発達が歩行者に与える影響を考慮する必要があると言える。本研究は、スマホ社会におけるウォーカブルなまちづくりのあり方を検討する上で参考となる知見を得るため、スマホ利用が歩行者の来街目的や行動に与える影響について比較・分析を行うものである。調査・分析の結果、スマホ利用が歩行者の「目的」と「歩き方」に与える影響を明らかにし、スマホ社会におけるウォーカブルなまちのあり方を検討する上で参考となる知見を得ることができた。

キーワード: ウォーカブル, 歩行者回遊行動, スマホ社会

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、「歩行者中心のウォーカブルまちづくり」や、「回遊性の高いまちづくり」といった言葉を掲げた取り組みが全国的に進められている。一方で、「ウォーカブル」や「回遊性」といった言葉の定義は曖昧であるとともに、必要性は感じているものの、その意義について正しく理解されているとは言い難いのが現状である。

また、ウォーカブルなまちづくりを実現するためには、まず地域全体を俯瞰して見るのが大切であるが、その地域の機能立地や街並みなどの特徴を把握することは出来るものの、その中を歩行者がどのように歩き、どういった行動を展開するのかについて予測・判断することは難しい。このことは、エリアを面的に回遊するウォーカブルなまちづくりを実現する上での課題と言える。

そして、近年ではECサイトの普及や新型コロナウイルスの流行により、ネットを通じた購買行動が増えるとともに、スマートフォンの普及・発達が、まちなかにおける歩行者の歩き方や移動経路に影響を与えているものと考えられ、単に都市構造や機能立地を読み解くだけでは、歩行者の回遊行動を推測することは困難である。

このことから、今後はこのスマホ社会において、歩行者の「目的」や「歩き方」がどう生成されるのかについて、地域の機能立地や街並みとの関係に加えて、スマホ利用の影響も踏まえた知見の蓄積が必要であると考えられる。

齊藤³⁾など、都市における歩行者の回遊行動や回遊目的についての研究は少なくないが、都市の機能が、回遊目的や移動経路に与える影響について分析しているもの

は、高浜ら²⁾など僅かに散見される程度である。

また、SNSと購買行動の関係に関する研究は散見されるが、スマホ利用が都市における人間行動のあり方に与える影響にまで言及しているものは見当たらない。

本研究は、スマホ社会におけるウォーカブルなまちづくりのあり方を検討する上で参考となる知見を得るため、各種都市機能や観光資源が充実している浅草地区を対象に、スマホ利用が歩行者の「目的」や「歩き方」に与える影響について比較・分析を行うことを目的とする。

また、本研究では、ウォーカブルなまちづくりについて「歩いて楽しいまちづくり」と解釈し、歩いて楽しいまちとは「歩行体験」と「目的地での体験」の両方が充実しているまちであると定義する。スマホ利用の有無によって、歩行者の「歩行体験」と「目的地での体験」の質がどう変化するのかを重要な論点として、分析・考察を行う。

(2) 研究の方法

本研究の目的を達成するには、まち歩き中にスマホ利用や都市の機能・様相が歩行者の「目的」や「移動経路」に与える影響を明らかにする必要があるため、実際のまちで被験者に「スマホ利用有り」「スマホ利用無し」の二通りでまち歩きを行なってもらう。

本研究ではこの実験で得た情報を元に、①歩行者の「目的」と「歩き方」に関する全体的な傾向を把握した上で、②歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序、③歩行者の「目的の所在」と「移動経路」について、「目的のきっかけ」や「どのような意識で歩いているのか」

に着目した分析を行うことで、④スマホ社会における歩行者の「目的」や「歩き方」の生成プロセスについて明らかにする。

また、分析の視点として、スマホ利用の有無によって歩行者の「目的」や「歩き方」がどう変化するかということに主眼を置いているため、歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序や、歩行者の「目的の所在」と「移動経路」について詳細な分析を行うだけでなく、スマホ利用の有無によって、それらがどう変化したか、またその要因について分析を行うことを研究の主軸とする。

(3) 実験の方法

まち歩き中の「目的」や「歩き方」を記録するため、GPSロガーを用いて移動経路を記録するとともに、googleフォームを用いて、街歩き中に発生した「目的」や「歩き方」に関する情報を取得する。さらに、実験後の被験者に対し、インタビューを行うことにより、より詳細かつ具体的な回遊行動について把握することとする。

実験の被験者は、スマホを普段から使用することが多いことと、ある程度まち歩きの経験が豊富であることを条件として、20歳前後の建築・まちづくり(土木)を専門に学ぶ学生を対象とする。また、一緒にまち歩きを行う誰かに干渉されることなく、被験者個人が都市やスマホの情報から受け取る影響を分析するため、まち歩きは一人で行動することとする。

実験日は、11/21(火)から12/22(金)にかけて、雨の日や祝日・休日は除き、被験者ごとに2日間実験日を設定する。実験時間は、時間帯や制限時間によるまち歩きの違いを極力避けるため、12時から17時のうち3時間とする。昼食は事前にとることを条件とする。

通常のまち歩きでは、何かしらの目的を持った上で行動することが多いため、まず、まち歩きの最初の目的として「第一目的」をあらかじめ設定する。本実験では、浅草のまち歩きで頻繁に発生すると考えられる、①カフェ(喫茶店)での飲食、②お土産の購入、③食べ歩き(飲食物のテイクアウト)の3つを設定することとする。

(3) 実験の対象地

本研究は、まち歩き中の「目的」と「歩き方」に着目しているため、対象地は歩行者の目的や歩き方に与える「影響要因」がまちなかに多く点在している場所とする。さらに、ウォーカブルなまちづくりのあり方を検討する上で参考となる知見を得るため、歩行者中心の通りや魅力的な沿道機能が多く集積する浅草地区を対象地とする。通常のまち歩きでは地区を越えての移動もあり得ることから、まち歩きの出発地点だけを定め、対象地区内では決まったまち歩きの範囲は設けないこととする。

2. 歩行者の目的と歩き方に関する全体的傾向

(1) 実験データの分類と用語の定義

本実験では、被験者から得た情報を元に、a) 目的、b) 目的のきっかけ、c) 歩き方に関するデータを抽出し、それぞれについて内容に基づく分類を行った。

a) 目的

本研究の分析対象となる「目的」は、全60回(30名×2回)の実験結果から、473件抽出することが出来た(スマホ利用無しの場合:233件、スマホ利用有りの場合:240件)。また、抽出した「目的」について、以下のように分類を行った。

- ・購買:商品を購入する場合(商品を購入した直後に飲食をする場合や、参拝をする・おみくじを引くなど対価に対する実態のない消費行動については、これに含まない)。
- ・飲食:商品を購入し、それを飲食した場合(商品を購入した直後に飲食をした場合は、「購買」ではなく「飲食」として扱う。ただし、商品を購入し、ある程度時間が立った後に飲食を行った場合は、「購入」と「飲食」に切り分けて、別の目的として扱う。また、飲食をしながら休憩する場合もあるが、その場合は「飲食」として扱う)。
- ・散歩観光:散歩を行う場合。また、観光地や広場などの公共空間に来訪する場合。
- ・店内散策:商品の購入を伴わず、店内に入る・散策する場合(入店する直前までの本人の意思を問わず、商品を購入した場合は「購買」として扱う。また、入店する直前まで購買目的を持っていたが、結果的に商品を購入しなかった場合も「購買」として扱う)。
- ・観察・眺望:空間要素や人間の観察、また風景や空間を眺める場合(「散歩観光」や「休息」を含む場合も多いが、何らかの目的地に訪れることや休憩することよりも、何らかの対象を「見る」ことに主眼が置かれている場合を、「観察・眺望」として扱う)。
- ・休息:(基本的には座って)休息をとる場合(「観察・眺望」を含む場合も多いが、被験者の報告の中で、明確に「休む」と明記されているものを「休息」として扱う)。
- ・撮影:(その対象や機材を問わず)撮影を行う場合。
- ・その他:以上の何にも当てはまらない場合。

b) 目的のきっかけ

本研究の分析対象となる「目的のきっかけ」は、全ての「目的」に対応する形で全466件抽出した。目的によ

ってはそのきっかけが複数個あるものも存在するが、本研究では、発生した目的に対して直接的に影響した、または最も強い影響を与えたきっかけのみを抽出した（被験者からの報告内容と、調査後のインタビューに基づいて判断する）。

また、抽出した「きっかけ」について、以下のように分類を行った。

- ・機能立地：各種都市機能の立地性がきっかけとなった場合（例：ある機能が近くに存在する場合や、歩く途中に存在する場合など）。
- ・スマホ情報：スマホで得た情報がきっかけとなった場合。
- ・空間環境：建築から都市のスケールまで、空間や環境の全体がきっかけとなった場合。
- ・空間要素：建築や都市の一部がきっかけとなった場合（店舗の商品なども含む）。（例：店先の看板が気になる、建物のファサードが気になるなど）
- ・人間行動：人間の行動や量（賑わいや落ち着き）がきっかけとなった場合。
- ・知覚・感情：暑い・寒い・疲れたといった身体感覚や、お腹が減った・用を足したいといった生理現象、その他内容が具体的かつ外的な要因を受けずに発生した感情がきっかけとなった場合。
- ・既知情報：実験開始以前に既に被験者が持ち合わせている情報がきっかけとなる場合。
- ・趣味嗜好：被験者の趣味嗜好がきっかけとなる場合（その他のきっかけが特に無く、被験者の趣味嗜好のみが影響した場合のみ、「趣味嗜好」として扱う）。
- ・その他：以上の何にも当てはまらない場合（何となくといった抽象的な感情の場合は、「その他」として扱う）。

c) 歩き方

今回の実験で使用したGPS ロガーから実験中の移動経路を把握するとともに、被験者からの報告を元に実験中の「歩き方」について分類を行った。

本研究では歩き方について、A) 歩行者が現在歩いている通りにも、その先の通りにも目的がある、B) 歩行者が現在歩いている通りには目的があるが、その先の通りには目的がない、C) 歩行者が現在歩いている通りには目的はないが、その先の通りには目的がある、D) 歩行者が現在歩いている通りにも、その先の通りにも目的がないの4種類に分類した。

さらに、現在歩いている通りに目的がある場合、その目的を、沿道の機能・通りの様相・通りの賑わい・通り

の落ち着きの4種類に細分類するとともに、現在歩いている通りに目的がない場合、過去の経路選択に影響を受けている・なんとなくの2種類に細分類した(表-1)。

表-1 「歩き方」の分類・整理

①現在歩いている通りに対する目的の有無	②現在歩いている通りの先に対する目的の有無	③通りに見出している目的やその経路を選択した理由	
現在歩いている通りに目的がある	通りの先に目的がある	沿道の機能に目的を見出している	A
		通りの様相に目的を見出している	
	通りの先に目的がない	通りの賑わいに目的を見出している	B
		通りの落ち着きに目的を見出している	
現在歩いている通りに目的がない	通りの先に目的がある	過去の経路選択に影響されている なんとなく	C
	通りの先に目的がない	過去の経路選択に影響されている なんとなく	D

(2) 歩行者の「目的」と「きっかけ」に関する全体的な傾向の把握

目的ときっかけの全体的な傾向を把握するために、図-1 に示すグラフを作成したところ、スマホ利用が無い場合に比べて、スマホ利用が有る場合では、歩行者の「目的」の数や「きっかけ」の割合が変化する傾向が見られた。

また、今回の実験においてスマホ利用が直接的に目的の発生状況に影響したのは、その他も含め、購買・飲食・散歩観光・店内散策の4項目のみであった。



図-1 歩行者の「目的」別に見た「きっかけ」の割合

(3) 歩行者の「歩き方」に関する全体的な傾向の把握

被験者からの報告を元に実験中の「歩き方」について分類・整理を行った上で、被験者の歩き方の特徴(通りや通りの先に対する価値や目的の有無)を明らかにするため、図-2 のグラフを作成した。スマホ利用が無い場合に比べて、スマホ利用が有る場合、①「現在の通りには目的があるが、通りの先には目的がない」割合が低いこと、②「現在の通りには目的がないが、通りの先には目的がある」割合が高いこと、③「現在の通りと通りの先両方に目的がない」割合が低いことが明らかとなった。なお、「現在の通りと通りの先両方に目的がある」歩き方は、スマホ利用の有無を問わず、その割合が低いとい

うことが分かった。

これらのことから、スマホ利用が無い場合に比べて、スマホ利用がある場合、歩行者の通りや通りの先に対する「目的意識」が変わる可能性があることが示唆される。

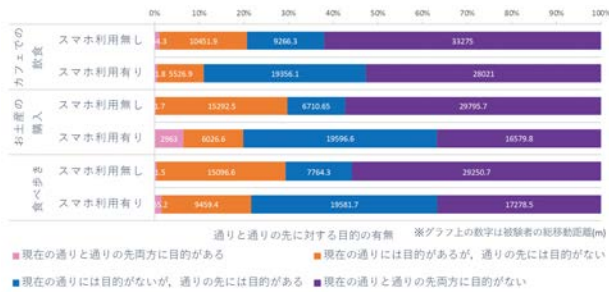


図-2 第一目的別にみた歩行者の歩き方 (通りや通りの先に対する目的の有無)

次に、被験者が現在の通りに対して目的を見出す場合に着目して、見出した目的の対象別にその割合を示すグラフ (図-3) を作成したところ、どの第一目的においても、スマホ有りの方が沿道の機能に目的を見出す割合が高いことがわかった。

また、第一目的が「お土産の購入」の被験者の多くが、他の第一目的の人に比べ、「沿道の機能」に価値を見出した歩き方をする割合が多いことや、第一目的が「食べ歩き」の被験者の多くが、他の第一目的の人に比べ、「通りの落ち着いた」に価値を見出した歩き方をする割合が多いことなどが分かった。

このことから、歩行者が通りに対して見出す目的の対象とその割合については、スマホの利用だけでなく、歩行者の「第一目的」が影響するということが示唆される。また、今回は歩行者が通りに対して見出す目的の対象とその割合に着目したが、その数や移動経路などについては、後の章で分析を行なうこととする。

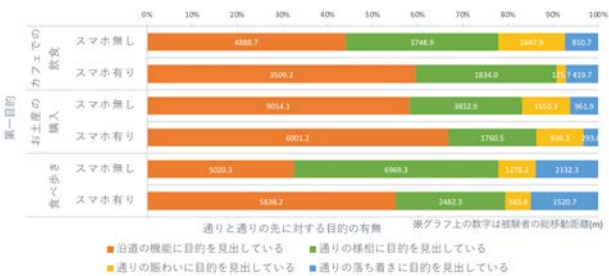


図-3 歩行者の歩き方 (現在の通りに見出す目的の対象)

3. 歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序に関する分析

(1) 実験データの整理と分析の方法

本章では、被験者から得たデータを元に、歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序に関する分析を行う。「目的」と「歩き方」については、2章で体系的な整理を行なったが、「目的」についてはこれまでの分類に加

えて、その目的を達成する地点に到着する以前に発生したものか、その目的を達成する地点に到着した際に発生したものかの2種類に分類を行い、前者を「計画目的」、後者を「偶発目的」と呼ぶこととする。

本章では、以上の分類に基づきながら「目的」と「歩き方」を時間軸で整理し、被験者それぞれの特徴を把握した後、第一目的毎のスマホ利用の有無における、歩行者の「目的」と「歩き方」に関する傾向を明らかにする。

また、本分析はあくまで「目的」や「歩き方」の前後関係に主眼を置き、それらが発生した時間の長短については触れないこととする。また、目的や歩き方の種類には着目するが、目的のきっかけや詳細な歩き方については、次章で分析を行うこととする。

(2) 歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序に関して

歩行者の「歩き方」について、被験者間で2つの共通したケースが見られた。

a) ケース①

1つ目は、スマホ利用無しの場合に比べて、スマホ利用有りの場合に、通りにも通りの先にも目的を持たない歩き方が減り、通りの先に目的を持って歩くことが増えるケースである。この内、スマホ利用無しの場合は、通りにも通りの先にも目的を持たない歩き方をする中で偶発的な目的が発生していたが、スマホ利用有りの場合では、計画目的を設定した上でまち歩きを行う途中で偶発的な目的が発生するようになるケースも見られた (図-4)。

通りに対して目的を持つ歩き方を「歩行体験に楽しさを感じている状態」と定義した場合、ケース①では「歩行体験の質」は変わらないが、スマホ利用によって、「自分の趣味嗜好を反映した目的地」に来訪する機会が増えることで、「目的地での体験の質」を高めることができる。

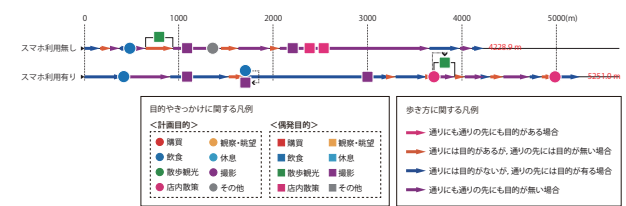


図-4 歩行者の目的と歩き方の生起順序 (ケース①の一例)

b) ケース②

2つ目は、スマホ利用無しの場合に比べて、スマホ利用有りの場合に、通りに対して目的を持った歩き方が減り、通りの先に目的を持って歩くことが増えるケースである (図-5)。

このケースでは、スマホ利用によって、「自分の趣味嗜好を反映した目的地」に来訪する機会が増えることで、「目的地での体験の質」を高めることができる。一

方、通りに対して目的を持つ歩き方を「歩行体験(その通りを歩くという行為そのもの)に楽しさを感じている／価値を見出している状態」と定義した場合、ケース②では「歩行体験の質」が低下していると推測される。

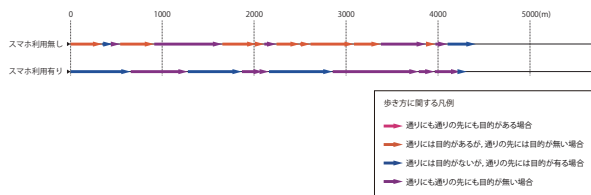


図-5 歩行者の歩き方の生起順序(ケース②の一例)

このように、スマホの有無により歩行者の「歩き方」が変化する可能性が高く、スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものと考えられる一方、歩行者によっては「歩行体験の質」が低下する場合があるということが分かった。

4. 歩行者の「目的の所在」と「移動経路」に関する分析

(1) 実験データの整理と分析の方法

本章では、被験者から得たデータを元に「目的の所在」と「移動経路」に関する整理・分析を行う。まず、2章・3章で分類を行なった、「目的」と「歩き方」について、地図上で整理を行なった。

整理の結果、浅草中心部以外のエリアでは、都市の機能や様相のバラエティが乏しいことから、エリア内の歩き方や発生する目的の種類は、スマホの有無を比較しても大きな変化は見られなかった。

そこで本章では、まず被験者の目的がどのエリアで発生したのか、またどのエリアを移動したのかに着目した分析を行なった後、浅草中心部を対象に、同じエリア内においてスマホの有無が歩行者の目的と歩き方に与える影響について分析を試みた。

(2) 歩行者の「目的の所在」や「移動経路」に関する特徴の把握

被験者の目的がどのエリアで発生したのか、またどのエリアを移動したのかに着目して分析を行なったところ、歩行者の「目的の所在」や「移動経路」については、スマホの有無というよりは、第一目的の種類とその所在が大きく影響することが分かった。

一方で、第一目的がお土産の購入の被験者は、スマホの有無を問わず全体を通して、浅草中心部をメインとした移動や目的が多いものの、スマホ利用有りの場合、隅田川の東側での移動や目的が増える被験者も多いことが分かった(図-6・7)。

(3) 都市の機能や様相が歩行者の「目的」と「歩き方」に与える影響に関する分析

歩行者の目的の所在と移動経路の特徴を把握した上で、各エリアの「機能」や「様相」が歩行者の「目的」と「歩き方」に与える影響について分析を行うために、スマホ利用の有無を問わず歩行者が移動する機会の多かった浅草中心部を対象に、同一のエリア内においてスマホ利用の有無が歩行者の「目的」と「歩き方」に与える影響について分析を試みた。分析の結果、以下のことが明らかとなった。

a) 歩行者の「目的」に関して

被験者それぞれの性格や、被験者以外の来街者の存在などの人的要因には着目せず、都市の機能立地、スマホ情報、空間・環境、空間要素の4項目に着目し、これらの要因によって発生した目的として、購買、飲食、散歩観光、店内散策、観察・眺望、休息、撮影(その他は含めない)を対象に分析を行なった。

分析の結果、どの第一目的においても、スマホの利用の有無に関わらず、発生する目的の種類や、そのきっかけ、発生場所は、被験者によってそれぞれであり、共通点は見られなかった。

b) 歩行者の「歩き方」に関して

「目的」と同様に人的要因には着目せず、都市の機能や様相が歩行者に与える影響を分析するため、通りに対して目的を持つ場合、かつ沿道機能と通りの様相に価値や目的を持っている歩き方を対象に分析を行なった。

分析の結果、被験者によってスマホ利用の有無によって、エリア内の通りに対する目的意識が変化することが分かった(表-2)。

また、第一目的によって、その変化の特徴が変わる傾向も見られた。その中でも非常に特徴的なのは、第一目的が「カフェでの飲食」、「お土産の購入」の被験者は、スマホ利用がある場合、スマホ利用が無い場合に比べ、通りの機能や様相に価値を見出す機会が減った被験者が多いことである。

表-2 スマホ利用の有無による通りに対する意識の変化

スマホ利用ありの場合、スマホ利用無しの場合に比べ	第一目的		
	カフェでの飲食	お土産の購入	食べ歩き
通りの様相に価値を見出す機会が増えた	A-10		C-4,C-6,C-9
通りの様相に価値を見出す機会が減った	A-5,A-8,A-1,A-7	B-2,B-3,B-7,B-8	C-1,C-5,C-7,C-8
通りの機能に価値を見出す機会が増えた	A-1,A-5	B-1,B-2	C-1,C-4,C-6,C-3,C-5,C-6
通りの機能に価値を見出す機会が減った	A-4,A-6,A-7,A-2	B-4,B-5,B-7,B-9	C-7,C-9,C-10

このことから、歩行者はスマホを利用する場合、通りに見出す価値が変化する可能性が高いことが推測され、前章での分析において示唆された、スマホ利用に伴う「まち歩き体験」の質の低下が、同一のエリア内においても発生することが明らかとなった。

5. まとめ

(1) 結論

本研究の成果は以下の通りである。

a) 歩行者の「目的」と「歩き方」の全体的な傾向

・歩行者の「目的」、「目的のきっかけ」、「歩き方」について、その内容ごとに分類を行った上で、スマホ利用の有無両方の場合における、発生しやすい「目的」や「目的のきっかけ」、「歩き方」について明らかにした。また、スマホ利用が直接的に影響を与える目的として、本研究では「購買」「飲食」「散歩観光」「店内散策」の4つの目的がこれに該当した。

b) 歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序に関して

・歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序について、被験者毎の特徴を整理・分析した。
・第一目的毎に、「目的」と「歩き方」の生起順序の違いが生まれることが分かり、第一目的が、「目的」と「歩き方」の生起順序に大きな影響を生む可能性を示唆した。
・スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものの、「歩行体験の質」が低下する可能性があることが分かった。

c) 歩行者の「目的の所在」と「移動経路」に関して

・第一目的毎に、「目的」や「移動経路」に特徴があることが分かった。
・同一のエリア内においても、スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものの、「歩行体験の質」が低下する可能性があることが分かった。

(2) スマホ社会における歩行者の「目的」と「歩き方」の生成プロセスに関して

まず、スマホ利用の有無を問わず、まち歩きの出発地点や、決められた時間内で移動可能な行動範囲及びその範囲が持つ都市の機能や様相、歩行者の属性や性格が、歩行者の「目的」や「歩き方」に大きな影響を与えるものと考えられる。

スマホ利用が有る場合と無い場合で大きく変わるのは、「目的地での体験の質」と「(目的にもよるが)目的地の所在」、そして「歩行体験の質(通りに対して価値を見出して歩くか否か)」であることが本研究で明らかとなった。また、本研究においてはスマホ利用が「目的の種類やその生起順序」、「歩き方の生起順序」に直接的な影響を及ぼす訳ではなく、スマホ利用無しの場合に比べてスマホ利用有りの場合に歩行者の「移動経路」や「歩き方」が変化することで、その場から受け取る価値(目的のきっかけ)が同時に変化することにより、「目的の種類やその生起順序」、「歩き方の生起順序」へ二次的に影響を及ぼしていることが分かった。

歩行者はスマホ利用の有無を問わず、常にその場から何かしらの情報(その具体性は問わず)を受け取っているが、スマホを利用することで、その情報を受け取ろうとする意識が、スマホ利用無しの場合に比べて変化する場合によって低下する)ことで「歩行体験の質」が低下する可能性がある。また、このことが理由で、スマホ利用有りの場合には「歩行体験の質」よりも「目的地での体験の質」が優先される傾向にあることも考えられる。

このことから、今後スマホ社会におけるウォーカブルなまちづくりを考える上では、都市機能の充実と景観の保全・向上など、都市における「目的」や「歩き方」への影響要因を拡充させ、エリアの魅力を高めることが重要であると言える。また、スマホの情報に関わるサービスの充実により、歩行者の目的や歩き方に対して効果的な働きかけを行うことで「歩行体験の質」と「目的地での体験の質」を向上させることも必要であるとする。

具体的には、本研究で対象とした浅草駅周辺では、浅草の中心市街地や水辺で、歩行者の多様な「目的」に加え、「目的を持った歩き方」が多く見られた。これは、単に施設や店舗、広場、公園などの「点的な機能(魅力)」だけではなく、その周辺の街路や、空間にも魅力があり、場合によっては、店舗や施設の店構えが、周辺の街路や空間のイメージを作り、周囲と馴染むことで、「点的な機能(魅力)」が「線的」に繋がり、「面的」に広がっていることによるものと考えられる。

さらに、このような都市の機能や様相だけではなく、浅草駅周辺では、様々な情報発信やスマホ上の魅力的なコンテンツも充実していることも重要な要素だと考えられる。単にエリア内の「点的な機能(魅力)」をPRするだけではなく、様々な観光コースを設定したり、通り毎でのマップを作成することで、「エリアの面的な機能(魅力)」をPRしていることも歩行者の回遊行動を左右する要因となっている。

このように、エリアの魅力そのものを高めることと、それを面的にPRすることの両方を充実させることが今後の「ウォーカブルなまちづくり」では必要であり、これが上手くいかない場合、歩行者の「歩行体験の質の低下」に繋がりがかねないということを指摘し、結論とする。

(3) 今後の課題

本研究における今後の課題を以下に示す。

a) 異なる地域間での比較分析

本研究は、浅草駅周辺を対象として実験を実施したが、歩行者の「目的」や「移動経路」に最も影響を与えるのは都市の機能や様相であるため、地域が変われば実験の結果に違いが生まれる可能性がある。また、異なる地域同士を比較することで、都市機能や様相から、歩行者が

受け取る情報についてより詳細かつ正確な分析を行うことができるようになる。

b) 都市の様相に関する詳細な調査・分析

本研究は、浅草中心部における都市の機能立地を調査することに重点をおいたが、その様相については、大まかに把握したのみである。今後は都市の様相に関して、詳細に調査・分析を行うことが重要であると考えられる。

c) 被験者の性格の分析と属性の多様化

歩行者の「目的」や「移動経路」に最も影響を与えるのは、都市の機能や様相であるが、歩行者自身の属性や、性格、趣味嗜好が与える影響も大きいものと考えられる。今後は歩行者の性格や趣味嗜好などを分析した上で、被験者の年齢の幅を広げることや、一人ではなく、ペアで街歩きを行なってもらうことで、より詳細かつ多角的に歩行者の「目的」や「移動経路」に関する分析ができると考えられる。

d) スマホの多様な利用方法

本研究では、スマホ利用有りの場合においても、街歩きをしながら音楽を聞く行為や動画を鑑賞するような行為を禁止したが、実際の街歩きではそのような「ながらスマホ」によって、歩行者の「目的」や「歩き方」が変化する可能性も高い。

その他、日程や時間帯、第一目的等の設定を変えることで、様々な結果が得られる可能性がある。今後はそのような条件設定や、調査の方法などを変えながら、より正確かつ多角的な視点から、スマホ利用がまちなかの歩行者に与える影響に関して、知見の蓄積を期待したい。

参考文献

- 1) 斉藤参郎：都心空間における回遊行動の目的生起順序について、日本都市計画学会学術研究論文集、第 28 回／pp. 55-60, 1988
- 2) 高浜康亘, 福井恒明：行動と意味から見た街歩き体験の分析、景観・デザイン研究講演集、No. 7／pp. 98-108, 2011
- 3) 朴 喜潤, 佐藤 滋：中心市街地における都市空間構成と歩行者回遊行動に関する研究：歩行者追跡調査結果と回遊単位概念を用いて、日本建築学会計画系論文集、71 巻、605 号／PP143-150, 2006
- 4) 中村翔一, 佐々木葉：プロトコル分析による場面に着目した回遊行動に関する研究、景観デザイン研究講演集、No. 5／pp. 216-220, 2009
- 5) 長澤将皓, 佐々木葉：都市空間の回遊行動にみる場所を介したインタラクションの記述と特性に関する研究、景観デザイン研究講演集、No. 8／2012